

古文

古文 古人の生き方 「物語」

● 古文の窓

『平家物語』のあらまし



講師
山本章博

学習のねらい

前回まで「木曾の最期」の場面を読んできましたが、それは『平家物語』のほんの一部にしか過ぎません。今回は、『平家物語』の全体像を捉えてみたいと思います。また、こうした合戦を描く意味についても考えてみましょう。

● 学習のポイント ●

- 〈一〉 『平家物語』の成立と琵琶法師について知る
- 〈二〉 平家の都落ちの場面について知る
- 〈三〉 平家の滅亡の場面について知る

■ 『平家物語』の成立と琵琶法師について知る

● 『平家物語』の成立

成立年・作者未詳。一二〇〇年代前半に原型が成立したか。その後さまざまな形の『平家物語』が成立していった。

*現在、一般に読まれている『平家物語』は、覚一本『平家物語』と呼ばれるもの。覚一本『平家物語』は、一三七〇年頃（室町時代）に、明石覚一という琵琶法師によってまとめられた。

● 琵琶法師とは

琵琶という楽器を弾きながら、『平家物語』を語って聞かせる僧侶のこと。

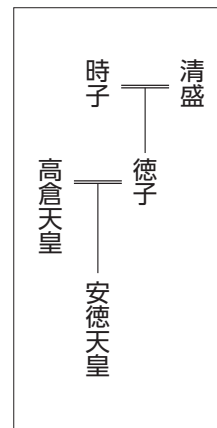
← 『平家物語』は、琵琶法師によって語られた。

← 『平家物語』の語り物としての表現の特徴。

- ・ 耳で聞いて理解できる。場面が想像しやすい。
- ・ 音便が多い。

■平家の都落ちの場面について知る

●平清盛の関係系図



●源平の合戦の経過（「木曾の最期」まで）

- 一一八〇年 五月 源頼政拳兵 京都の宇治川の戦い
- 八月 源頼朝拳兵
- 九月 源義仲（木曾義仲）拳兵
- 一〇月 富士川の戦い
- 一一八一年潤二月 平清盛死去
- 一一八三年 五月 倶利伽羅峠の戦い
- 一一八三年 七月 平家都落ち 源義仲入京
- 一一八四年 一月 源範頼（蒲の冠者）軍と源義経軍が源義仲軍を破る
義仲死去

●「忠度都落」のあらすじ

平家の武將の平忠度は和歌を好んだ人であった。忠度は都落ちするが、途中で引き返して、藤原俊成のところに、自分の和歌を書いた巻物を渡しに行く。藤原俊成は、藤原定家の父で、ちょうどその時、勅撰和歌集を編集していた。忠度は、その勅撰和歌集に、ぜひ自分の歌を一首でも入れて欲しいということで、俊成のところへ、その候補となる歌をたくさん書いた巻物を渡しにいったのである。その後、忠度は討ち死にし、平家も滅亡するが、その三年後に『千載和歌集』という勅撰和歌集が完成する。そこに忠度の歌が「よみ人知らず」として「首入った」。

■平家の滅亡の場面について知る

●源平の合戦の経過（「木曾の最期」以降）

- 一一八四年 二月 一の谷の戦い
- 一一八五年 二月 屋島の戦い（那須与一）
- 三月 壇の浦の戦い 平家滅亡

「壇の浦の戦い」における安徳天皇入水の場面

…御涙におぼれ、ちいさくうつくしき御手をあはせ、まづ東を伏し拝み、伊勢大神宮に御いとま申させ給ひ、その後、西に向かはせ給ひて、御念仏ありしかば、二位殿やがていただき奉り、「浪の下にも都のさぶらふぞ」となぐさめ奉つて、千尋の底へぞ入り給ふ。

【現代語訳】

安徳天皇は、涙をはげしく流し、小さくかわいらしい手を合わせ、まず東に向かつて拝み、伊勢神宮にお別れを申し上げられ、その後、西の極楽浄土の方に向かつて、念仏を唱えられたので、二位殿（つまり安徳天皇の祖母の平時子）は、すぐに、天皇を抱きかかえ、「波の下にも都はございますよ」といって、深い海の底へお入りになった。